

# 目次

まえがき.....益岡隆志 iii

## 第1部 導入編

叙述類型論に向けて..... 益岡隆志 3

## 第2部 論文編

属性叙述と語形成..... 影山太郎 21

「って」提題文の表す属性と使用の広がり ..... 岩男考哲 45

状態述語文の時間性と叙述の類型..... 眞野美穂 67

事象叙述述語による属性叙述

—ハンガリー語動詞過去分詞形による名詞修飾を通して— ..... 江口清子 93

事象叙述の有題文と無題文

—自然会話をういたケーススタディ— ..... 砂川有里子 115

対人認知の心理過程と言語表現 ..... 唐沢 穰・菅さやか 139

## 第3部 研究史

叙述類型研究史(国内編)..... 岩男考哲 163

叙述類型研究史(海外編)..... 眞野美穂 193

執筆者一覧..... 221

# まえがき

以前から私は、叙述の様式として、対象の属性を述べるタイプと時空間に実現する広義の出来事を述べるタイプを区別すべきであるという考えを抱いており、その区別を明示するために、拙著『命題の文法』（1987年）で「属性叙述」・「事象叙述」という用語を導入した。その後、論文集『シリーズ言語対照第5巻：主題の対照』（2004年）に収めた「日本語の主題」と題する拙論の執筆に際し、叙述の類型を考えることの重要性を再認識した。

それをきっかけに、日本語文法学会第6回大会（於明海大学、2005年11月26日・27日）で「叙述の類型とその射程」と題したパネルセッションを行うこととなった。発表者は岩男考哲、眞野美穂、江口清子の3氏であった。このパネルセッションの発展版として、2007年3月21日に神戸で「叙述の類型をめぐって」というワークショップを開催することにした。このワークショップでは、上記3氏の発表に加え、影山太郎、砂川有里子、唐沢積・菅さやからの諸氏による3件の発表が行われた。本書は、このワークショップにおける計6件の発表を中心に編まれたものである。

次に、本書の内容のアウトラインを紹介しておこう。叙述の類型の考察を進めていくためのキーワードとして、「属性」・「主題性(提題性)」・「時間性」・「類型の相互関係」を挙げることができる。「属性」をキーワードに掲げるのは、「属性」という概念をどう捉えるかの検討なくして、叙述の類型の議論を深めることは難しいからである。「主題性(提題性)」と「時間性」は、属性叙述と事象叙述をそれぞれ特徴づけるものである。また、属性叙述と事象叙述には相互に交渉があることから、「類型の相互関係」も重要なキーワードとなる。

第1部導入編と第2部論文編では、これらのキーワードを軸に議論が展開される。まず「属性」をどう捉えるかという課題は、導入論文と第2部の影山論文において取り扱われる。導入論文では属性にどのようなタイプのものがあるのかが検討され、影山論文では恒常的な「属性」と時間限定のあ

る「準属性」を区別すべきこと、及び、属性(内在的屬性)に特化した言語形式(属性の書き換えが関与する言語形式)が存在することが論じられる。

「主題性(提題性)」をめぐる課題を提示する論考は、第2部の岩男論文と砂川論文である。岩男論文は文のレベル(具体的なテーマは「って」提題文)において、砂川論文は談話のレベル(具体的なテーマは事象叙述文での有題・無題の現れ方)において、それぞれ主題(提題)の問題を考察している。一方、「時間性」にかかわる問題を取り上げた論考は、第2部の眞野論文である。眞野論文では、時間性が複雑な形で関与する与格主語構文を主たる対象として論述がなされる。

もう1つのキーワードである「類型の相互関係」については、第2部の江口論文と唐沢・菅論文によって話題が提供される。江口論文は、事象叙述語が属性叙述を表し得る名詞修飾構造を考察することにより、また唐沢・菅論文は、事象に関する認知と属性に関する認知とのあいだの関連性を社会心理学の観点から考察することにより、属性叙述と事象叙述のあいだに重要なつながりが見出されることを論じている。

以上の第1部導入編と第2部論文編に加え、本書にはさらに第3部として、叙述の類型に関する研究史が収められている。研究史の「国内編」と「海外編」は、日本国内での研究の流れの解説、及び、海外の言語研究における研究動向の解説を意図して書かれたものである。

本書を構成する諸論考によって、「叙述の類型」という概念の重要性を広範かつ多角的に示すことができたものと自負している。「叙述類型論」に対する関心が多く読者に共有されることを願う次第である。

最後に、本書のために快く論考をお寄せくださった執筆者の皆さま、上記のパネルセッション・ワークショップで有益なご指摘をくださった方々、また、本書の編集にご尽力いただいた、くろしお出版編集部の斉藤章明氏に感謝の意を表したい。

2008年2月29日

益岡隆志

# 叙述類型論に向けて

益岡 隆志

## 1. はじめに

近年の言語研究においては、周知のとおり、項構造(argument structure)・事象構造(event structure)・動詞意味論(verb semantics)などの研究に見られるように、広義のイベント(出来事)の研究が大きな成果を挙げている。このイベント研究の領域には、格・ヴォイス(他動性)・アスペクト・テンスといった文法カテゴリーが関係するが、これらのカテゴリーについても掘り下げた研究が行われている。

他方、日本語に目を向けると、イベントを表す文に加え、対象の属性を表す文の重要性が浮上してくる。事実、日本語文法の研究では以前から、イベントを表す文と対象の属性を表す文の違いに着目した研究が行われてきた。そのような違いを最初に明確な形で指摘したのは佐久間(1941)であり、その後、三上(1953)や川端(1976)もそれに類する見方を提出している。

佐久間(1941)は、「物語文」と「品定め文」という種別を導入し、これらにそれぞれ時や場所の限定、提題が関係するというものを指摘している<sup>1</sup>。佐久間のこの種別を引き継いだ三上(1953)は、「物語文」・「品定め文」を「動詞文」・「名詞文」という名称に置き換えたうえで、動詞文の主題が述語とのあいだに格関係を持つのに対し、名詞文の主題は格関係を持たないとい

---

1 このような種別を導入する背景には、文をゲシュタルトと見る佐久間の考え方があ  
る。以下は佐久間(1943:156-157)からの引用である。

“文”をすぐに“語”の集合に還元して考へることを避けて、一応その特異な立場を認めてかかるべきだとするなら、“結語法”のやうな術語は不適當になる。(中略)“文”全体を一つの単位として出発し、(中略)全体におのづから具備される部分への分節の行き方をする際に、多かれ少かれ形づくられてゐる最初の全体に一単位としてふさわしい“構文”といふ名称を与えることにする。

# 属性叙述と語形成

影山 太郎

## 1. はじめに

言語の本質的な機能は情報の伝達であるが、この伝達機能には2つの種類が認められる。ひとつは、現実あるいは架空の世界において特定の時間と空間で展開する出来事ないし状態を表現することである。

- (1) a. 課長は今だけ結婚指輪をしている。
- b. この保育園では子供達はふだん裸足ですか？
- c. しばらくの間、廊下に立っていなさい。

これらの文は平叙文(1a)、疑問文(1b)、命令文(1c)といった構文の違いはあっても、いずれも何らかの出来事や行為が特定の時間に起こることを述べている。このような時間の流れに沿った出来事や状態の描写は、事象叙述(益岡 2004)あるいは出来事叙述(event predication: Krifka et al. 1995)と呼ばれる。

これに対して、(2)のような文は主語ないし主題の不変的な状態を表す。

- (2) a. 新しい英語の先生は(\*今だけ)青い目をしている。
- b. ご主人は(\*ふだん)長身ですか？
- c. ゾウは(\*しばらくの間)鼻が長い。

これらは時間の流れに左右されない固定的な状態であるから、「今だけ」や「ふだん」といった時間を限定する副詞を付けることができない。主語ないし主題の永続的な性質を描写するこのような状態文は、属性叙述(益岡 2004)あるいは特徴付け叙述(characterizing predication: Krifka et al. 1995)などと呼ばれる。なお、状態述語については、(1b)のような例は場面レベル叙述(stage-level predication)、(2b)のような例は個体レベル叙述(individual-level predication)とも呼ばれる(Carlson 1980)。

まず注意が必要なのは、事象叙述文と属性叙述文の違いは動詞や形容詞と

# 「って」 提題文の表す属性と使用の広がり

岩男 考哲

## 1. はじめに

本稿では、以下のような「って」を用いた提題表現(これを以下「って」提題文と呼ぶことにする)について考察を行う。

- (1) A：この問題はゲノムの構造から考えた方がいいな。  
B：ゲノムって何？ (丹羽 2006)
- (2) 甲：きのう田中君に会いました。  
乙：田中って、どの田中ですか。 (田窪 2002)
- (3) 人間って愚かなものだ。 (丹羽 2006)
- (4) 田中さんって変な人ですね。 (田窪 2002)

これは近年、話し言葉を中心に用いられる提題文として扱われてきた表現である。これまで、この「って」提題文については提題文についての研究や談話内での使用といった観点からの議論は盛んに行われてきた。それに対して本稿では、叙述の種類という観点から分析を試みたい。

具体的には、主に(ア)～(エ)について考察を行う。

- (ア) 先行研究は「って」提題文をどのように捉えてきたのか。
- (イ) 「って」提題文はどう分類できるか。
- (ウ) 「って」提題文はどういった属性を表すのか。
- (エ) 「は」を用いた提題文と「って」提題文の違いは何か。

以下では、まず2節で代表的な先行研究の概観を行い(ア)、それらに導かれ3節で本稿なりの「って」提題文の分類を示す(イ)。次に3節の分類に基づき4節で「って」提題文が表す属性の種類を観察する(ウ)。そして5節で「は」を用いた提題文(これを「は」提題文と呼ぶ)と「って」提題文の違いについて本稿の考察から分かる点について述べる(エ)。6節は本稿のまとめである。

# 状態述語文の時間性と叙述の類型

眞野 美穂

## 1. はじめに

状態述語文とは、状態的性質を持つ形容詞や名詞、時には動詞を述語として取る文のことであるが、特に日本語の分析においては、主に動的事象を叙述する非状態述語文だけではなく、属性や静的事象を叙述する状態述語文の分析は欠くことのできないものである。これまでの言語研究では、主に動的な事象を叙述する動詞述語文が研究の中心的課題となってきたが、状態述語文は様々な面で、非状態述語文とは異なる性質を持ち、その究明は重要な課題である。

本稿では、状態述語文の中でも格フレームと時間性の関与が複雑な様相を呈する(1)のような与格主語構文(格フレーム：与格－主格)に焦点を当て、叙述の類型という観点からその構造を分析する。

### (1) 健には英語が難しい。

状態述語文の叙述の類型はどのようなものであり、それがどのように構造と関係するのであろうか。主に2つの問題が指摘できる。1つは、状態述語文の叙述の類型がどのように区別されるのか、そしてその際、叙述の類型の解釈に関わる要素にはどのようなものがあるのか、という問題である。そして2つ目は、叙述の類型が状態述語文の分析にどのように有用であるのか、という点である。第1点目に関しては第2節で、第2点目は第3節で与格主語構文とそれに関連する自動詞文を取り上げ、分析を行う。そして、通常2項を取る与格主語述語が、自動詞文の構造を取る要因を叙述の類型の分析から明らかにし、その有効性を示したい。

# 事象叙述述語による属性叙述

—ハンガリー語動詞過去分詞形による名詞修飾を通して—

江口 清子

## 1. はじめに

動詞は、叙述用法(predicative use)、すなわち文の述語として用いられる場合、典型的にはある時空間に実現・存在する事象(event)を叙述する<sup>1</sup>。例えば(1)では、動詞「故障した」は文の述語として用いられ、過去の一時点において「車が故障する」という出来事が起こったことを表現している。

(1) 車が故障した。

一方、動詞が限定用法(attributive use)、すなわち名詞を修飾するものとして用いられる場合、(1)のような事象を叙述する解釈だけでなく、対象である主名詞の属性(property)を叙述する表現としての解釈が出てくる。例えば(2)では、動詞「故障した」が名詞「車」を修飾するものとして機能しており、「特定の車が過去の一時点において故障した」という出来事を叙述するものとしての解釈が成立するが、その他に、対象である主名詞「車」が「故障している」という属性を有するものであるという解釈も可能である。

(2) 故障した車

この「…タ」による名詞修飾構造における叙述用法にはない、属性叙述としての解釈に関しては、寺村(1984)が「形容詞的用法」として他の用法と明確な区別を示して以来、さまざまな研究がなされてきた。とりわけ重要なものとして、まずAbe(1993)の研究が挙げられる。そこでは、「…タ」が対象の状態変化後の結果状態を表すことが明らかにされた。さらに、金水(1994)、

1 「…テイル」「…テアル」はこの限りではない。(i)は、叙述用法でも属性叙述としての解釈が優先される例である。

(i) a. 砂糖が入っている。

b. 砂糖が入れてある。

# 対人認知の心理過程と言語表現

唐沢 穰・菅 さやか

## 1. はじめに

夏目漱石の『草枕』は冒頭の独白問答で有名であるが、それは次の一文で始まっている。

(1) 山路を登りながら、こう考えた。(夏目, 1906/1990, p.1)

われわれは、こうした単純な行動の叙述を唐突に与えられた場合でも、物理的な移動を表す「登った」や、一時的な精神活動を指す「考えた」という記述を受け止めるだけで終わるといふことは、ほとんどない。むしろ、予備知識もないこの人物についてさまざまな推論を働かせ、叙述者がこの情報を伝えてきた意図や、その内容の意味ついて思いを巡らせるのが普通であろう。語用論の立場から言うと、発話や伝達の主な目的は、そうした「推意」を伝えることにこそあると考えられるほどである(Sperber & Wilson, 1995)。そして後に述べるように、心理学的な研究の結果は、そうした推論が本人の自覚もないまま自発的に行なわれることを示している。

自己や他者の行動記述から、人がどのような推論を行なうかについて、これまでに多くの社会心理学的な研究が行なわれている。そこで取り上げられてきた主要な問題として、少なくとも次の二点をあげることができる。まず、行動の記述から人は、その行為者の持つ属性を知ろうとする。—この人は山歩きが趣味なのだろうか？ だとしたら、きっと健康な人なのだろうか。あるいは若者だろうか？ 登りながら考えごとをするとは、どのような性格の持ち主だろうか？ もの思いにふける性格ならば、他にどのような行動が予想できるだろうか？—推論される属性が、時や状況が変わっても変動しない安定的なものであるほど、その人物を「理解」したことになるであろう。こうした理解を成立させる心理的過程を明らかにしようとするのが、社会心理

# 叙述類型研究史(国内編)

岩男 考哲

## 1. はじめに

本稿では、本書のメインテーマである叙述の類型という概念や、それに類する概念を提示する研究を幾つか紹介する。

その際、先行研究をいくつかに分類して紹介するが、これは便宜的なものであることをお断りしておく。従って、別のグループに分けた研究間にまったく関わりが無いというわけではない点をご了承いただきたい<sup>1</sup>。

## 2. 諸研究の分類

まず2節では、3節で紹介する先行研究をどう分類するかを述べる。

その分類にあたり、本稿では金水(1997)を参考にしたい。金水(1997)は、国文法(日本語文法)の研究の流れを江戸から現代に至るまでバランス良くまとめたものである。その金水(1997)は、現代の日本語研究の流れを大きく以下のように分類している。

- (1) 現代日本語記述文法の流れ
- (2) 言語学研究会の流れ
- (3) 根拠解釈派<sup>2</sup>の流れ
- (4) 欧米の言語理論に直接依拠する流れ
- (5) 工学系の流れ

この(1) - (5)の流れについて以下簡単に説明する。

まず(1)から見ていく。この流れについて金水(1997)は、「寺村秀夫の影響を直接・間接に受けた研究者(p.123)」とし、更に「彼らの共通知識としては、寺村のほかに、三上章、南不二男、仁田義雄、益岡隆志、久野暉らの

1 なお、本文中では敬称を省略してある。

2 厳密には「根拠解釈派」という語は尾上(1984、1990)による。

# 叙述類型研究史(海外編)

眞野 美穂

## 1. はじめに

本稿では、本書のテーマである「叙述の類型」に関連する研究が海外において、特に欧米においてどのように行われてきたのかについて、主に英語を対象としたいくつかの研究を取り上げ、紹介する。

用語の違いは別にして、日本語における叙述の類型研究は歴史を持つものである(本書所収岩男論文「叙述類型研究史(国内編)」参照)。つまり、叙述の類型とそれに類する概念は、日本語研究の中では重要な観点の1つであったと考えられる。しかし海外に目を向けると、どうであろうか。海外の研究、そして異なる言語を対象にした研究においては、自ずからその研究は異なる観点から行われることになるだろうし、その焦点、そしてその分析方法や類型の区分にも違いがあるかもしれない。

しかし、文が行う叙述の内容というものは、言語を問わず、そして枠組みを問わず、言語研究の課題とされてきた。本稿では、海外で行われてきた研究の中から、叙述の類型と類似の観点から行われてきた、もしくは叙述の類型研究に関連する、と考えられる研究の一部を取り上げ、その分析を紹介する。欧米ではどのような分析がどのような現象に対してなされてきたのか、そして本書で示される「叙述類型論」とそれらの研究がどのように関連づけられるのか、という点について見ていきたい。日本語とは異なる語族に属する英語においても、叙述の類型が統語現象と関わる形で問題となるのか、もしそうであるとすればどのような現象に叙述の類型が反映されているのか、という点について、いくつかの現象、もしくは概念に焦点を当て、その先行研究を紹介する。

海外における叙述類型研究を取り上げるにあたり、大きな問題が2つある。